新しい授業づくりの文化をつくる

令和5年6月7日
「能力ベイスの授業づくり実践講座」通信
第3号　A セット　教材研究会

■講座の目的
①未知の問題場面に出会っても、解決に向けて行動できる汎用的な力(資質・能力)を子供たちに育むため、学習指導要領に基づいた授業づくりについて実践を通して主体的に学ぶ。
②教師同士のネットワークを構築し、講座での学びを吹田市内で広げるとともに、自校での OJT に生かすことにより、学習指導要領に基づいた授業づくりの文化を築く。

■講座の目標
令和6年度スタートにあたり、吹田市100%の教職員が学習指導要領に基づいた授業づくりを目指す。
「学習指導要領に基づいた授業とは･･･である」を自分の言葉で語る。

A セット教材研究会　5月15日(月) @岸部市民センター

単元名:「大陸に学んだ国づくり」(「小学社会6」教育出版) 授業者:佐川　一季先生 (佐竹台小学校)

「能力ベイスの授業づくり実践講座」では、教材研究会と授業研究会を1セットとして実施しています。今回は A セットの教材研究会を行いました。授業者の提案を基に Why の視点「本単元で子供達が身につけるべき資質・能力は何か？」、How の視点「本単元で子供たちはどのように学ぶのか？」について協議しました。協議後、齊藤先生より社会科を学ぶ価値と史実とのかかわり方についてご講義いただきました。この学びを基に、6 月 15 日(木)の授業研究会へ向けて、授業者、推進メンバーでさらなる授業改善に挑みます。

授業者の提案

佐川　一季先生
(佐竹台小学校)

Why なぜ学ぶのか

子供達が身につけるべき資質・能力は？

→いろんな人がいて、いろんな人の民意で成り立っていることに子どもたちには気付かせたい。

→多面的・多角的にみられる視点(資質・能力)をつけたい。

What 何を学ぶのか

子供達の学習対象は？

内容知

〇縄文時代から時代が進展していき、人々の集団が「むら」から「くに」へと変化し、各地に王が出現したこと。
〇大和政権がつくられ支配を広めたこと。
〇遣隋使や遣唐使の派遣により大陸から学んだことを政治に生かし、天皇を中心とした律令国家が確立されたこと。

方法知

〇意思決定型の学習
【事実を基に目標・ゴールを設定→選択・解釈→判断(自分で決める、自分の納得解をもつ)】

How どのように学ぶのか

子供達の学習過程は？

目標・ゴールの設定
「天皇中心の国づくりが行われていた時代の、人々の幸福度はどれくらいだったのだろう。」
→3人の天皇に焦点化し、その時代の幸福度を総合的に判断する。

聖徳太子	中大兄皇子	聖武天皇
冠位十二階 十七条憲法 仏教 →豪族や民などそれぞれの立場の人はどう思うかを考える。	大化の改新(公地公民、班田収授法、税の仕組み) →曽我氏は、貴族は、豪族は、農民は、どのように考えたか。	大仏造立 国分寺建立 →混乱をおさめようとした様子を、それぞれの立場の人はどう思うか。

児童の判断
「天皇中心の国づくりにおける人々の幸福度は〇である。
なぜなら～だから。この時代の課題は～であるので～すべきである。」

論点１
本単元で育てるべき資質・能力が学習指導要領に基づいた提案になっているか。

論点２
提案された単元計画で学習指導要領に基づく授業が実現されているか。

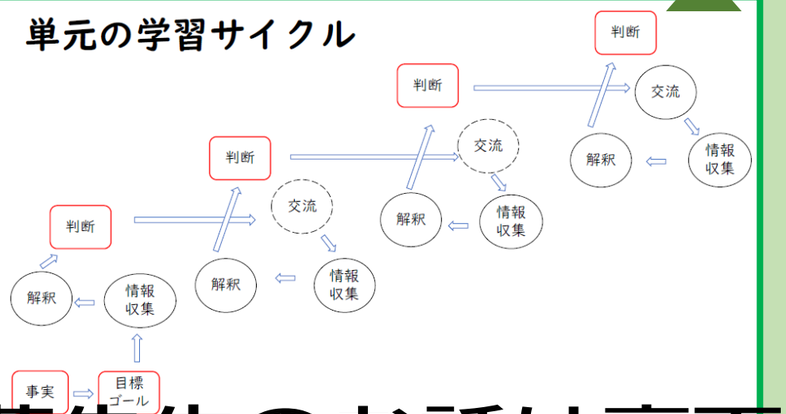
提案スライド

本単元での目標・ゴール
「天皇中心の国づくり」が行われた時代の人々の幸福度を表現しよう。

単元前の児童の姿
天皇中心への違和感、抵抗感
公民を既習(「国民主権」が基準に)

単元後の児童の姿
・天皇中心の国づくりに対する理解
(→当時の社会課題を解決する手段)
・様々な立場の人の状況をふまえて、総合的に幸福度を表現できる

単元の学習サイクル



「天皇中心の国づくり」が行われた時代の人々の幸福度はどのくらいだったのだろう？

総合的に判断
「天皇中心の国づくりにおける人々の幸福度は〇である。
なぜなら～だから。
この時代の課題は～であるので～すべきである。」

齊藤先生のお話は裏面へ

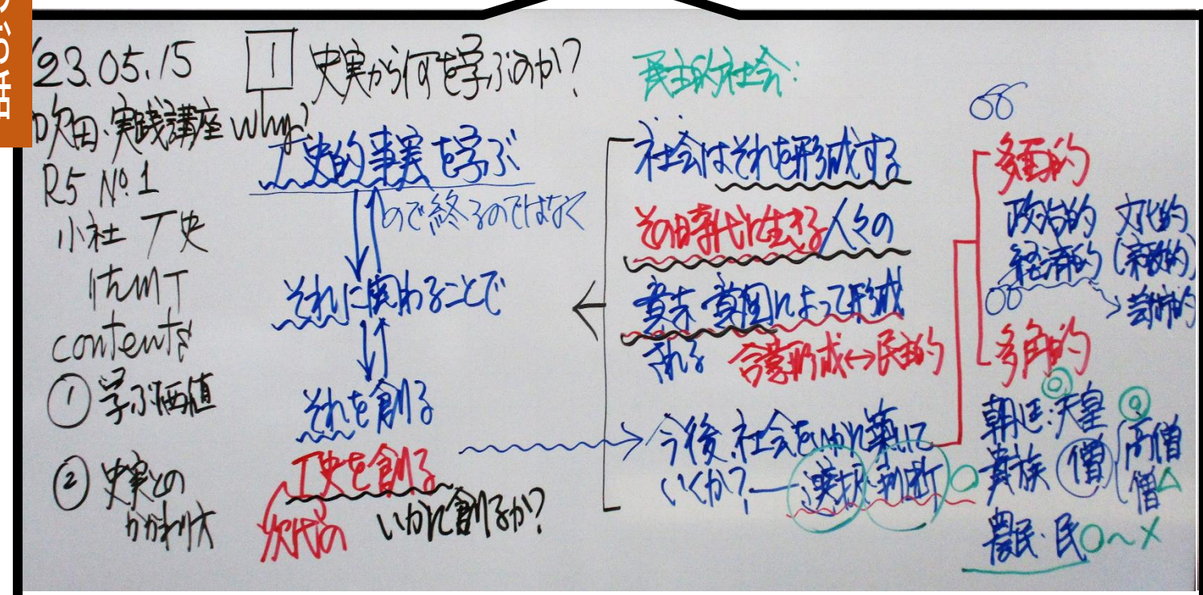
齊藤先生のお話

社会科の目標【学習指導要領　第1節（1）】

社会的な見方・考え方を働かせ，課題を追究したり解決したりする活動を通して，グローバル化する国際社会に主体的に生きる平和で民主的な国家及び社会の形成者に必要な公民としての資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

Why　なぜ学ぶのか

子供達が身につけるべき資質・能力は？



自分たちの暮らし、歴史を「創る」ために、歴史を「学び」、「関わる」

歴史的事実を「学ぶ」ので終わらないのが重要。歴史的事実を「学ぶ」けれども、それで終わるのではなく、歴史的事実に「関わる」ことで、さらにはそれ（歴史的事実）を「創る」。ここに価値がある。

「創る」とは次代の歴史を創る、つまり、学んだ子供たちが自分たちの今度は暮らし、歴史を創っていく。そのために、歴史の勉強をしている。

次代を創っていくときの正しい判断ができる、正しい選択ができる、色々な角度から見つめることができる、そういう子供にしていきたい。この事実というものの分析をする、その眼鏡をより確かなものにしていきたい。ある一方向の情報、命令、支配、そういったようなものに縛られることなく、より民主的で自由でより合意形成ができる社会でなければいけない―そのようなことを最終的には学んでいきたい。

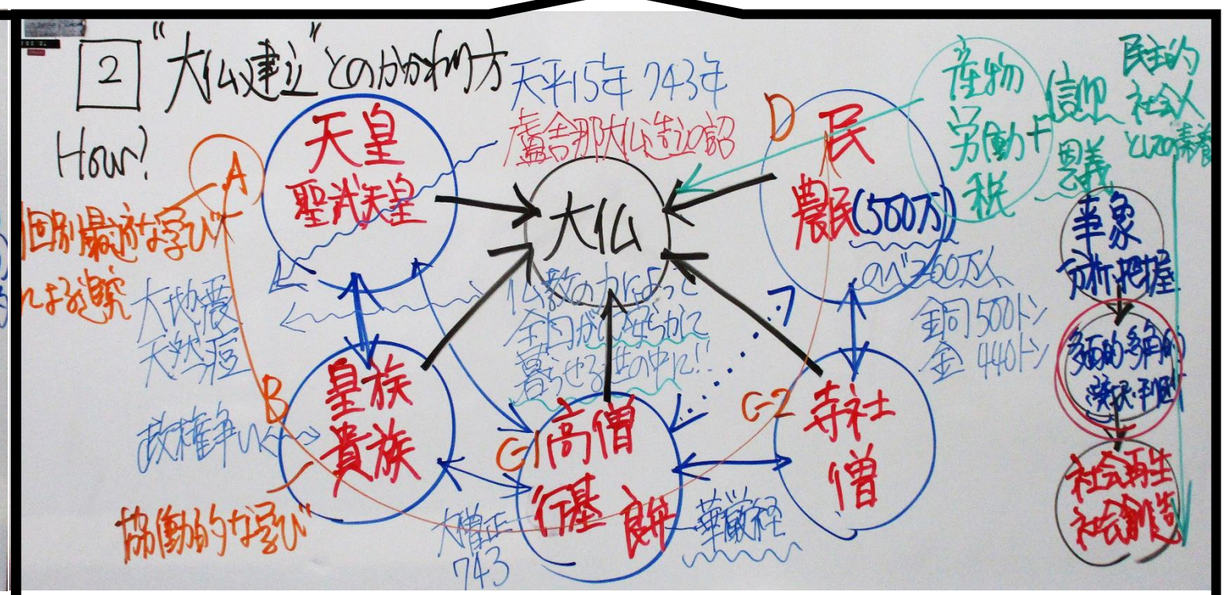
多角的・多面的という眼鏡で歴史的事象を見る

幸福度など色んな形でチャレンジしてよい。大事な話は、その理由と根拠が言えること。なおかつ大事なのは、多面的・多角的。「政治的」「経済的」「文化的」「宗教的」「芸術的」いろんな側面から眺め、「天皇」「貴族」「高僧」「僧」「農民・民」様々な立場で、自分の考えというものをしっかりと情報から選択し、最終的に判断できる。そういう子供にしたい。

●「多面的」「多角的」とは何か？
多角的：「立場」のこと。幕府や御家人、商人、朝廷等から見た時に、徳政令とはどんな風に写っていたのか等。
多面的：その立場の人から、眺めたときの「側面」のこと。例えば、武士が徳政令を考えるときの、「政治的な側面」、「経済的な側面」、「社会構造的な側面」等。【令和4年度　能力ベイスの実践講座新聞　14号より】

How　どのように学ぶのか

子供達の学習過程は？



史実をもとに、それぞれの立場から考える―大仏建立を例に

聖徳太子から一連の３つの時代、飛鳥、奈良、平安の入口くらいまでを全部１つのテーマは無理があるかもしれない。３つを平均的に扱うのではなく、ウェイトをかけて考えてみられるはどうだろうか。

例えば、大仏建立。743 年盧舎那仏造立の詔を聖武天皇が出す。「仏教の力によって全国が心安らかに暮らせる世の中にしたい。」そういうものが、詔には書かれている。ここに幸福度に関わるキーワードがある。全国が心安らかに暮らせる世の中にするために造ろうとした。本当にそれが実現したのかどうかを考えれば、史実とうまく繋がっていくことができる。

ここでいくつかの立場がある。天皇（聖武天皇）、皇族、貴族、高僧（行基、良弁）、寺社や僧、民　それぞれの立場とっての大仏は、どういうものだったのかーそういう眼鏡で見ていく。自分はどの立場で大仏建立の史実と向き合いたいかは、子供が決めればいい。これが個別最適な学び。全部の立場から考えなくてよい。それぞれに学びをもとに、後半はディスカッションをしていく。これが協働的な学び。

小・中で共通する社会科のプロセス

まず最初に大事なのは、「事象の分析と把握」。事象をしっかりと分析して把握する。続いて多面的かつ、科学的な考察とともにともに「選択・判断する」。それをしたことを元に「社会再生、または社会創造」。これは非常に重要。前回、宮本先生の教材研究会と、基本的なフレームは何ら変わらない。むしろ変わってはいけない。６年生なりに、さらに中１になりに行って進めていきたい。それが小中の接続。

推進メンバー

推進メンバー企画

校内にどう伝えていけばよいだろう？

本年度の講座では、推進メンバーを募集し、授業づくりや講座の企画・運営に参加していただいています。今回は、受講者のアンケートから講座で学んだことをどのように学校に広めていくかを話し合いました。

【様々な方法で校内に発信！】

●学力向上で通信を作成し、発信する。　●校内研修を企画し学びを発信する。

【学校全体で学ぶ場をつくる！】

●学校をあげて、この講座に参加する。
➡今回の講座では、校内研修として学校全体で参加してくださった学校もありました。
本年度は1セットから受講ができますのでおススメです！
●校内で Why,What,How の視点を使って教材研究会と授業研究会にチャレンジする。
●教育研究大会など、みんなでそろって学ぶ場を設定してほしい。

【編集後記】

今回は、授業者の提案を基に、受講生が「What」、「How」の視点で熱く議論を交わした。講座がスタートした1年前、この視点自体がそもそもどういうことがよく分からなかった。今回の議論は、昨年に比べ本当に大きく様変わりした。少しずつ受講生が授業を創っていく際に、見るべき視点が変わってきたことを実感した。さらに充実するものになるよう、授業を「学ぶ」で終わることなく、自ら「関わり」、授業づくりの文化を「創る」ことを目指していきたい。（文責：教育センター山埜）